

フリードリッヒ
ヘッツベル
「わ
ち
幼
時」
(六)

豊
子
譯

十

私がスザンナの陰氣な教室から、今度新しく建てられた明るい氣持のよい初等學校に移つた、それとほゞ同じ頃に、私の父はその小さな住家を去つて、今度は借家住ひをしなければならなかつた。これはまた私にとつては一つの不思議なコントラスト（對照）であつた。學校は大きくなつた、私がスザンナの學校に居つた頃には、其窓硝子と云へば纏に使ふ青黒い圓みのある厚板硝子の小さいのを穢い鉛で框をつけたもので、實に一枚の窓戸にこの小片を澤山合せてあるので、なか／＼戸外が見えない、それを好奇心のつよい眼は無理にもこの硝子越しに戸外を見やうと試みたものだが、今度の小學校では幅の廣い、銀松で框取つた輝いた窓から戸外を見詰める事が出来た。又授業も、スザンナの學校では何時も遅く始まつて早く濟んだが、今度は、時間通りに行はれた。私は簿記臺もインク壺もついた、居心地のよい机に

腰かけた、まだ新しい木の香ペンキの香は實に私を刺戟して全く私は何とも云へない喜ばしい酔ひ心地になつた。また私の讀み方が上手だと云つて感心した先生は、初め謙遜して三番目の腰掛を擇んで置いた私に、一列目に移り、しかも其處の一等の上席を占める様にと申し渡した。私は全くこの時殆ど天福を授けられた様な氣がした。

之にひきかへて、私の家は收縮し暗くなつてしまつた。私がよくお天氣のよい日には遊び仲間と共に駆けまはる事の出来た小庭も、もう今はない。雨の日や風の日、戸外に出られない時には愛想よく迎へて呉れた玄關も、今度はない。私は狭い室に閉ぢ込められて私一人の身動きもやつとである、とても友達をつれて来るわけには行かない。入口の所にある少し許りの場所もすぐ前が往來になつてゐるので、偶々友達が遊びに来ても滅多に辛棒して遊んで呉れぬ。かく迄變化を來したと云ふのも全く可笑な事が

原因となつたのであつた。と云ふのは私の父は結婚と同時に抵當の引受をして他人の負債を背負ひ込んでしまつた。所が幸運にも其債権者が放火犯のため長い間罰を監獄で償はねばならぬと云ふ事になつたからよかつたものゝ、さうでなければ疑もなくもう遠うに追ひ出されて居る筈であつた。この債権者と云ふのが誠に恐るべき人間の一人で、悪のために悪を行ふと云ふ奴であつた。ある目的に達するのに實際早く、又容易いと云ふ事が解り切つてゐる、さう云ふ時にさへも、尙わざ／＼曲りまがつた道を行くのであつた。彼の容貌はと云へば、誰でも見るにたへぬ程で、人を待伏せする様な意地のわるい悪魔の眼をしてゐる、實際もつと幼稚な時代ならば魔法とか魔法使と云ふのはこんな顔かと信じさせたらうと思はれる。何故ならば、人の禍を見て喜ぶ心が、この眼の中に表現されて居るし、またその眼は不幸そのものをも必然的に擴大して見ずには置かない様に思はれた。

商賣は居酒屋と荒物屋で、身分の割合には有福以上金もあつたのだから全く氣樂に愉快に暮す事が出来たのであるのに、どうも彼は徹頭徹尾、神と人

とに敵對したに相違ない。私が大きくなつてから讀んだ探偵小説の中に於てさへも、またと再び遭遇しなかつた様なそんな悪戯を彼は氣儘勝手に行つた。例へば彼の妻が土曜日の夜に懺悔をしに教會へ行きたいと云つた時、上機嫌で許して置きながら、かのプロテスタントの慣例に従つて日曜日の聖餐式に列しやうとする。「その事はお前は願はなかつたぢやないか」と云つて行かせない。(註、プロテスタントにて懺悔をしたるものは必ず聖餐式に列する筈でこれやつと懺悔の儀式が完了するのでこれに列しなければ即ち中途半端な事になる)

或は何處か近所で善い馬が生れたと云ふ時に、彼は出掛けて行つてその馬の子に話にもならない様な安い値段をつける。持主が賣れないと云つて拒むと彼は曰く、「私はまたよく考へて見ませう。そして昔からある規則の『人間と云ふものは一度其れに就いて、賣らう買はうの相談を始めたものは必ず手放さなければならぬ』と云ふ事をよく服膺しませう。どんな事が起るか解りませんせ!!」と。

慥に、あらゆる警戒にも拘らず、其馬は遅かれ早かれ、野でか厩でか、足の筋を截ち切られて見出され、仕方なしに屠つてしまふ事になる。斯う云ふ筆

法でこの男は、遂には自分の氣に入つたものを何でも手に入れる事が出来た。

彼は、また、我から進んでその婿に虚偽の破産を（財産を隠蔽して破産にする）する事を幫助した、實は彼の方から其婿を誘惑したらしかつたが。叔この婿が偽りの誓を誓つてしまつてから、隠匿した物件を返してくれと頼むと彼は嘲笑して「裁判に訴へるなら訴へて見るがよい」と云つた。

これ程に悪運のつよい狡猾な悪黨も、放火の時にはさすがに自分の家の女中に圖らずも現場を見付けられて、どう／＼現行犯で取押へられた。かうした事情のお蔭で、私の父は僅か二三年この家を氣樂に占領して彼の短かい其の生涯の中のこの二三年を父は享樂したのである。父も人がよいので種々狡猾な口實で抵當にする事などに旨くこの男の口車に乗つてしまつたのであつた。監獄がその弟子を社會に送り返すや否や、我々は引越さねばならなくなつた。私達の祖父母が五十年以上も苦樂を共に分つたその場所を去らねばならなくなつた。

大掃除の時でさへ其の場所から動かされなかつた種々の古い家財道具が突然街路にぶらつき出た時、

時代つきのオランダ製の掛時計、丁度よく動かないで何時も混亂を惹き起してゐたこの時計が、突然五月の太陽の光に明るく照されて、梨の樹の枝にぶら下り、また丸い、蟲の喰つた食卓——この卓はその上に全く何も載つてゐない時に、よく種々のものを並べて喰べて見たいなあと云ふ欲望を起させたものだが、もうその慾も次第に薄らいだ——が脚がこれかゝつてブラ／＼になつて梨の木の下に持ち出された時、實にこの時は私にも私の弟にも世界の滅亡が來たかと思はれた。

然し、先づ、凡べてが私達子供には一つの觀物であつた、のみならずこの取片附けのために、私が永い事見失つて居た五色の煙管の頭が、何處かの鼠穴から出て來た。またその上に、其處此處の、我々と同時に引越す家の人達が、一緒に持つて行つても無駄骨折と思はれる様なガラクタを、彼方此方から探し出して子供に呉れる。子供は全く最後の屑まで利用する事をよく知つてゐるから。かうして遂にまもなく引越の日は私達子供にはお祭りの様に思はれて多少の心の感動なしでも、なかつたが、さりとて苦痛もなしに、私達は生れた其の場所を立ち去つた。

この引越しが、本來如何なる意味を有するかを私は後になつて漸く知つた、しかし後と云つても勿論間もなくの事であつた。私は、自分では知らずに居たが、此れ迄は一人の小貴族主義者であつた、今やこれは終りをつけてしまつた、その成行きは斯うである。元來人はたこ樵夫の小屋の様な小さな家でも、自分のものとして所有して居れば、丁度大地主や金持ちが宿無しを見下げる様に、やはり家をもたぬものを見下げる、同時にまた一種の尊敬を以て自分達は見上げられるものである。家の持主は、先づ先方から挨拶をされる、全くこれは丁度「挨拶」と云ふ手形を持つてゐる様なもので、もし、之を履行しなければ裁判に訴へても取もどす事が出来るので、誠に確なものである。所が若しも其の家主がもはや其地位を支へられなくなると、又此處に其程度に應じて斯う云ふ事實に遭遇する。即ち挨拶をさせられてゐた方のものが今度はこれ迄のいでゐた人々に對してその目上となつて居つた事に向つての復讐をするなど云ふ事になる。子供は、事々に凡べて両親に倣つて之と一致させるもので即ち私は出世の名譽も擔つたがはりにまた没落の屈辱も之を父と共にせなけ

ればならなかつた。

父が家を所有してゐた時分には、私とても小屋の息子として、また庭に梨や梅の木があると云ふ譯で大に名望を高めてゐた。果實のない冬時とても、私が夏になると何かを呉れると云ふ事で、子供達の間には滿更忘れられもしなかつた。最初は私の方に見當をつけられてゐた堅い、コチ／＼に凍つた幾つかの雪の球も私の耳の傍をかすめて飛んで行つてしまふ。何故なら私が時ならぬ時に響かきをさるかも知れないと云ふ事を恐れるから。

春が近づくこと、サア誰も彼もいろ／＼な小さな贈物を持つて來て私の愛顧を得やうとする、或は聖者の像を呉れる、或は五色の不審紙を、或は貝を。そして私は之に對する御禮として彼等が望む所のものを——秋の時に梨や梅をやる事を——約束する。一番早咲きの花が開くと、私はもう直ぐに指物屋のウイールヘルムと本式の誓約を協定する。彼は信用貸しに、或時は小さな車、或る時は人形とか、或時は小戸棚とか、かうした玩具を持つてくる、かう云ふ物は皆彼が父の仕事の時の木屑を貰つて自分で手綺麗に復た刻み直して造つたものである、そして私はこ

の報酬として一籠又は半籠の梅と梨をあげると云ふ約束をする。

枝が花で満ち輝くと、その收穫も亦、既にちやんと約定済になる、しかし確かに之は全く竊やかに行はれるので。何故と云へば私の母は私がした契約を實行する事をあまり好まなかつたからで。しかもウイルヘルムは、母の眼にはいつも心の大きいよく他人に物を呉れる人の様に映つた。

いよ／＼果實が熟する。この成熟のその時刻と云ふものは、よく人も知る如く、子供と大人と意見を異にするものである。既に私の誓約者は自分の庭の方から竿を突き出し石をその樹めがけて投げる。この間、私は誰か來はせぬかと充分氣を付けて、其の落ちて來る實を大急ぎでハラ／＼しながら拾ひ集める。私達は大抵お晝休みの時間を之に當てる。そしてまだ皆が果實の收りいれを始めない中に私はうまく私の負債——契約——を完全に果たす事に幾度も成功した、がまた時には不意打を食ふ——うつかりしてゐる中に大人の方で收りはじめる——とか、又は、やつてる所を捕へられる事もよくある。斯う云ふ場合にはウイルヘルムは無情にも、既に約束の代

價だけのものは大部分チヨイ／＼とポケットに入れてしまつてゐるのにそれに頓著なく、隙をねらつては素早く垣根をどび越えて來て私に貸しておいた玩具を奪ひ取つて行く。

しかし、もうかう云ふ事も皆過去の事になつてしまつた。そして家をうしなつたその結果は、最初から全く辛らかつた。どう／＼私の父も立派に「饑ゑたる人間」と云ふ名をつけられてしまつた。と云ふのも貧乏な人達によく有り勝な事だが彼等は「貧困は恥辱にあらず」と云ふ格言を、認める事は認めるが、しかも少しも之を實行しないからである。——やはり恥かしがつて見得を張るから饑ゑてしまふのだ。

——私の母とても、どうも何となく因循な性質とその上にこんなな貧乏しながらまだ、「身を貶す事は何時でも貶せる、何も急ぐには及ばない」と云ふ主義をやめないで固執してゐたのが大に手傳つて、ます／＼貧乏になつてしまつた。かくて父や母は馬鹿にされ始めたが、それは子供達にもすぐに影響した。

昔馴染の友達達は手をひいてしまふ、またよし遊んで呉れても「そろ／＼違ひ始めて來たな」と感づかせ

る様にする。それはまた無理もない、腹にオムレツを入れてゐる兒は、胃の腑をたゞ馬鈴薯だけで充たさなければならぬ子供をながし眼に見るものだ。

新しい友達に私達を嘲笑し、出来るだけ嫌やな舉動をする、否養育院の子供迄が押しかけて来る。この養育院は慈善的の造營物と病院との合ひの子のもので公の費用で維持されてゐる。こゝに養はれてゐる哀れな孤兒達は、所謂社會の最下級の階級を作つてゐるものである。皆同じ様に灰色の仕著せを著、學校では彼等獨特のベンチに、——丁度ゲツチンゲン伯の様に、勿論その根據は違ふが、——腰を掛ける、そして凡べての者から忌み嫌はれる。其處で彼等は自分でも半ば癩病人の様になつてゐる、そして「此奴は馬鹿に出来るな」と信するものゝ傍へだけ寄つて来る。

私は此時迄は空想家であつた。晝は垣根の後ろや井戸の蔭に隠れて面白がり、晩になると母や隣りのおばさんの膝に蹲つて、お伽噺や怪談をせびつてゐた。今や私は活動的の生活に追ひ込まれた。今や己れの身を防ぐ事が必要になつて來た。私は初めての擲り合ひの時には、しばらく躊躇もし、又幾度か臆

病にも免れやうと試みた後に、やつとたち向つたのであるが、もう二度目にはそれ程に恐れず、三度目四度目となつては、今度は趣味を見出す所まで進んで行つた。

我々の宣戰の布告は、かのローマ人やスバルタ人のが簡潔だと云ふが、それよりもつと簡潔なものであつた。一人の挑戰者がその相手方を見る。授業時間中に、先生が一寸後ろ向いてゐるその一寸の隙に。難かしい顔をして右手で拳をかたく握つてそれを口の所へ——いや鰐口と云つた方がよい——持つて行く。すると相手は、また次の安全な瞬間——先生の一寸の後向きの間——に同じ様な相圖を仕返へす。たゞ之だけの事であつた。そして正午にこの喧嘩は始まる。寺院の境内の墓場の傍での青草の生えてゐる場所で。武器と云へば自然の武器で、相撲や打ち合ひである、愈々となれば噛み合ひ、引き搔き合ひもする。全校生徒が立會ひの面前で始めるのである。さすがに私はチャンピオンの列まではのぼれなかつた、チャンピオンの名譽とする所は、一年中、眼の圍りを青痣にして、或は鼻を腫れ上らせて、歩き廻

る事であつたから。

然し、私は間もなく、私を善い子としてゐた母の名望をだいなしにしてしまつた。實はこれ迄は私は母から賞められるのが全く愉快であつたのだが。そして父の前では名望が上つた、と云ふのは父はかのフリードリッヒ大王が部下の將校に對してした様に子供達に對した。即ち擲り合ひをするを罰するが、しかしどうかして擲ぐられて來ると馬鹿にすると云

ふ遣りかたであつたから。

或る時、私は私の相手方の上にのしかゝつて、ゆつくりと嚇した時に、彼は私の指の骨まで噛みついた、そのため私は一週間も字を書く事が出来なかつた、また之は私には最も危険な傷であつた事を思ひ出す。そしてこの傷がまた私とこの相手との親しい友情を結ぶ基となつた。——かう云ふ事は大人になつてからもよく起る様に——。(完)

譯 了 の 後 に

艶 子

拙いながら、先頃より(第十九卷第九號以降)紹介して居りました「わが幼時」の譯を了へるに當り、感じた事などを申上たく思ひました。もとより、かの十九世紀の獨逸の三大劇作家ドramatistenの一人なるヘッベル先生のこの作を、子供中心の立場から眺めるのは、作者に對して或は失禮な事かも知れませんが、其處は容して頂きませう。

先づ人は凡て何歳頃からの事が記憶に残つてゐるものであるかと云ふ事は人によつてまち／＼の様です。文學的天才をもつた人はどうも普通の人より早い時期の記憶をよくとゞめてゐるのではないでせう

か。あの有名な小説家ディッケンスはかの「デビッド・カッパーフィールド」の中で「我々は大抵の人の普通考へるよりもつと早くからの事を記憶してゐるもので、ごく小さい子供の時代の事物の觀察は其の嚴